

『ベルタ・フォン・ズットナー』 シュテファン・ツヴァイク

世界大戦中の一九一七年、ベルンにおける民族協調を目指す
国際女性会議開幕にあたってのスピーチ

訳：糸井川 修・中村 実生

あらゆる価値を極めて巧みに転換させた現代は、現実世界のみならず、精神世界にも変化をもたらしました。かつて心の天空の高みに輝く星座のごとく畏敬の対象であった幾つかの名前は日常の光の中に没し、その一方で、平和な時代にはほとんど顧みられなかった人物たちが様々な出来事の投げかける影を背景に浮かび上がり、私たちの内なる世界において一段と存在感を増しています。そして今日では他のどの名前にもまして、長い間嘲笑的に語られてきた一人の女性の名前が私たちの心に聞こえてくるようになりました。ベルタ・フォン・ズットナーというその名前は、将来、精神史における英雄的かつ悲劇的名前の一つに数え入れられるでしょう。目には見えませんが、彼女の人生を貫いた考えが、今や全ヨーロッパ世界に命を吹き込んでいます。その息吹は、この瞬間にも満ちています。そして彼女の思想は本当は皆さんの中に生きているのですから、自らの人生を賭け、私たちの人生の中にその思想を築いてくれたあの女性を思い出さないのは、物忘れというにはあまりに恩知らずではないでしょうか。

ほかでもない私という人間に、この並外れた女性について皆さんにお話する権利があるのかどうか、私には分かりません。というのも——包み隠さず恥を承知で申し上げれば——私自身、彼女がまだ活動していたときに、彼女を心から尊敬することも彼女の作品の価値を十分に評価もしなかった、あまりに多くの人間の一人であると認めざるをえないからです。そして、もしその気になったなら、そうすることはなんと容易だったでしょう、なんと素晴らしく、感謝のこもった義務だったでしょう！ 彼女はすぐ近くに、ウィーンという私たちの世界の真っ只中に生きていたのです。彼女は私たちの身近にいて、一人ひとりに理解を求めていました。

そして、いつでも彼女にとって最高の喜びは、自分の思想の新たな信奉者を集めることでした。何度も、私は彼女に会う機会がありました¹⁾。彼女の善良さの表れた姿、温和な人となり、すでに年老いていたこの女性に生気を与えていた行動への意志が持つ無限の力、それらがあまりに感動的にありありと伝わってくるために、誰人も彼女に対する尊敬の念を抑えることはできませんでした。深い共感を抱いて、心ある一人ひとりが彼女の行動に続かねばなりません。ところが、彼女が将来に対する不安にかられ情熱を燃やして行動したとき、私たち皆がその思想に対して抱いたのは、なんと煮え切らぬ、ぞんざいで、怠惰な共感だったことでしょう。私たちは認めなくてはなりません。彼女の情熱的な努力がヨーロッパの思索の中心に置かれることなく、小さな会議の場に限られ、表には現れず、ほとんど気づかれないほどの影響しか及ぼさなかったことについては、結局、私たち全員が同罪なのです。そして、今の遅ればせの感謝の気持ちは、私たちを償い切れない罪から放免するものではありません。しかしながら、私たちは自分の過ちを認識すればするほど、一層この女性の道徳的な美しさと時代を越えた使命を正しく評価し、認識することもできるようになるのです。

皆さんがご存知のとおり、ベルタ・フォン・ズットナーは、今日私たちが怒りを覚えながらもその無力な証人となっている、この恐ろしい出来事を実際に体験することを免れました。そして、皆さんが集っている今日この場所で彼女が先頭に立つのを引き止めることができたのは、死だけでした。彼女は、あのサライエヴォにおける暗殺の一週間前に亡くなりました²⁾。運命はこのような劇的な暗示を好むものです。その一ヶ月後にはもう、世界戦争の回避という彼女が生涯をかけた思想は、彼女の後を追って消えたように見えました。しかし、無常であるのは人間だけであって、思想は決してそうではありません。思想は、言うなれば人類の不滅の魂であり、一人ひとりの人間と国家の中に宿りますが、人間や国家とともに死んだように見えるときも、見かけだけのことなのです。それは実現されるまで、次々と新たな人へ受け継がれてゆきます。そしてベルタ・フォン・ズットナーが、もしかしたらもう間近であったかもしれないこの実現を体験することは、許されませんでした。彼女の生涯は一見無駄であったようにも見えます。まさにそれゆえに、悲劇へと変わってしまった私たちの時代の理念に他ならないこの人生に、思いを馳せることが必要なのです。

ベルタ・フォン・ズットナーはオーストリアの貴族で、キンスキー伯爵家の令嬢として生まれました³⁾。彼女の存命中の活動がすべて、この半世紀にオーストリアが行ったただ二つの戦争、すなわち一八六六年の戦争⁴⁾と今次の戦争との間に挟まれているのは象徴的です。この二つのうちの最初の戦争を見たとき、彼女はまだほとんど子供でした。しかし、真の女性が戦争を目にしたときのように、彼女はあらゆる人間的な同情と計り知れない恐怖をもって見たのです。そして、その後の彼女の全人生は、この恐怖が彼女の祖国で、また全世界で繰り返される

のを防ぐ——なぜなら彼女はただオーストリア人であるだけでなく、世界市民でもあったので
す——という考えだけに向けられました。彼女は最初の本の題名に用いた三つの単語に、述べ
たいと思ったことすべてを込めました。それは『武器を捨てよ！』*Die Waffen nieder!*と呼ばれ
ました⁵⁾。皆さんがご存知のとおり、この本は——残念ながらその思想はまだなのですが——
世界中に広まりました。今までにただ一度だけ、女性が文学作品を通して、このような人の心
への訴えかけに成功を取めたことがありました。アメリカのピーチャー=ストー夫人の小説
『アンクル・トムの小屋』です⁶⁾。この作品は独力で奴隷制を打ち負かし、幾百万の隷属せる
人々を解放しました。脅かされた幾百万の人間を自らの小冊子によって解放することは、また
ベルタ・フォン・ズットナーの文学活動の目的でもありました。そして、これは皆さんに
とって意義深い一つの証左ではないでしょうか。もしも女性が自分自身に忠実であり続け、最
も根源的な人間の力、すなわち同情と母親の情に訴えるならば、女性であっても芸術において
頂点に達する能力が常に与えられているということなのです。ベルタ・フォン・ズットナーが
世界に向かって「武器を捨てよ！」と叫んだとき、彼女はこの最も自然で、最も根源的な感
覚、地上のすべての母が抱く母親の情に語りかけたのです。世界平和の思想を、より知的に、
より観念的に作り上げた人は他にいたかもしれません。とりわけトルストイは、一つの生命が
他の生命を尊重しなければならないことは人間の最高の自由であり、神への隷従であると感
じていました。一連の哲学者、法学者、経済学者もまた、民族紛争を血によって決着するのを避
けるために、影響力のある理論を考え出しました。そして私たちは今日ようやく、戦争の真っ
只中になって、各々が背負う人間としての内的責任と国によって課される外的責任との不一致
から数多の問題が生じていることに気づきました。しかし彼女、ベルタ・フォン・ズットナー
は一路邁進しました。彼女は、ただひたすら人類の理性に聖なる妄信を寄せ、世界中のあらゆる
聖書にある、まさにごく当たり前の真実、汝殺すなかれ、を繰り返し繰り返し説きました。
彼女はそれを「武器を捨てよ！」という新しい言葉で、彼女以前には誰もなし得なかったほど
情熱を込め、何度も、根気強く語ったのです。子供のいない彼女は世界に注ぐ愛を、限りな
く、あり余るほど持っていました。彼女が初めて「武器を捨てよ！」というこの言葉を世界に
向けて叫んだとき、人々は彼女のもとに駆け寄り、耳をそばだてました。しかし、彼女が「武
器を捨てよ！ 武器を捨てよ！」と、同じ言葉ばかり繰り返すと、その好奇心は薄れ始めまし
た。この思想の激しい一本調子は乏しさと、その明白さは凡庸さと見なされました。少なから
ぬ人が腹を立て、この平和の真っ只中でどうしていつも平和を求めて叫ぶ必要があるのか、と
考えました。彼女は、かしこぶった私たちの世界で幽霊を見た人のように扱われ、世論は次第
に彼女を心霊学者や神智学者、菜食主義者やヴォラピューク語⁷⁾の発明者たちが住む片隅へ、
精神病棟と隣り合わせのあの路地裏へと追いやったのです。しかし、彼女は諦めませんでし

た。あたかも人類の脳裏にあの叫びを刻みつけようとするかのように、何度もあの叫びを繰り返しました。次第に、彼女はすっかり物笑いの種にされ、風刺新聞の「平和のベルタ (die Friedens-Berta)」⁸⁾となりました。そして善意を無知と同列に扱う、例の強い軽蔑をこめて、彼女は善良な女性と呼ばれたのです。

しかし、あの三つの単語しか世界に向かって言うことがないと思われていた女性こそ、カッサンドラ⁹⁾の深い本能的感情と、同時に望楼守リュンケウス¹⁰⁾の警戒心を備えていました。彼女は、不安に導かれて、この世界戦争をいわば気配によって嗅ぎとっただけではありません、数十年間、訴え続けた諸国民の良心であっただけではありません。彼女は時いたれば、この時代に唯一不可欠の武器を取ろうと思っていました。すなわち、組織です。いつものように、彼女は注意深く観察していました。いかにしてあらゆる国々で一斉に、恐るべき戦争という仕組みが作り上げられたのか。いかにしてその組織があらゆる分野を統合し、産業、文学、芸術を自らの領域に取りこんだのか。いかにして人類の低劣な本能である、高慢、嫉妬、殺意、名誉欲が、もう一方の最も高貴な本能である、感激、献身、一体感とともに原料として利用され、その仕組みの中で形を変えていったのか。そして彼女が悟ったのは、心が無防備ではそのような巨大な仕組みを破壊できないこと、そのような組織に対しては同じように強い、いや相手以上に強い別の組織で対抗しなければならないこと、すなわち戦争の組織には平和の組織で対抗しなければならないことでした。組織の捉え方については、色々な考えがあるかもしれませんが——組織を現代の人類の勝利として肯定しようと、また人格の機械化として否定しようと、それは現代における最強の存在形態として現にあるのです。それを破壊しようとする者でさえ、今日では、その方法を自ら用いることによってしか為し得ないのです。ベルタ・フォン・ズットナーは、このことを予感的に知った最初の人でした——「準備がすべてである」、この軍人が好む言葉を彼女は平和のために敵から奪い取り、様々なものが統合した危機に立ち向かうため、すべてを結集しようと試みたのです。そして、内なる心の準備と外に向けた準備というこの考えが、国家だけでなく、個々の人間にとっても、いざというときの唯一の頼みの綱であったことがはっきりと判明しました。なぜなら最初の日から反戦の立場をとった数少ない傑出した人間のほとんどすべてが、思いつきでそう行動したのではなく、自分たちの理念を掲げる組織を通じて行動したからです。トルストイは、二十年に渡る集中的な思考によって防備を固めていました。ロラン¹¹⁾はこの戦争の随分前に、自らの小説の中でヨーロッパの血を分けた諸文化を比較し、崩れ去ることのない、より高貴な共同体についての確信を得ました。不測の事態に驚かなかった人、つまり準備をしていた人、心構えのできていた人だけが、精神による抗議に全力を傾ける用意ができていたのです。もし、ほとんどすべての人々が驚いた側であるのなら、それは彼らがまだ間に合ううちにベルタ・フォン・ズットナーが始めた、あの反戦組

織に加わらなかったからに他なりません。いうまでもなく、この永遠の課題を前にして、彼女の人生はなんと短かったでしょう！ 戦争を求める心はなんと軽々しく、平和主義の足取りはなんと重いのでしょうか！ というのも前者は、力、高慢、激情といった人類の剥き出しの本能に訴えかけ、太古の時代に持ち出された根拠に固く守られる千年の伝統の上に成り立っています。一方、平和を求める心は、いつも譲歩と和解という隠れた本能を引き出さねばならず、ユートピアという不確かなもの以外、伝統に立ち向かうものは何もないのです。

これらの困難すべてを、彼女、ベルタ・フォン・ズットナーは、私たちが知るよりももっと正確に認識していたのかもしれませんが。けれども、彼女は理想主義者でした。このことは、大抵の人が考えているように、理念に対する現実の抵抗を見過ごすとか、見誤るということではありません。現実の抵抗にもかかわらず、絶対に必要と見定めた理念に最後まで生きることなのです。確かに、彼女が携えていたのは、「武器を捨てよ！」というこのたった一つの思想だけかもしれません。しかし、この思想が正しいものであったというだけでなく、私たちの時代における唯一無二の重要な思想であったこと、それが彼女を永遠に偉大たらしめるのです。そして、彼女の三十年という活動期間の仕事とは、この思想をますます深く現実に根付かせることでした。しかしながら、誰が彼女を助けたのでしょうか、誰が彼女の側に立ったのでしょうか？ 誰が彼女の設立した平和協会に加入したのでしょうか？ 協会というものに対するあの不信から、自分たちは当然の務めを果たしているという卑しい高慢さから、私たちは皆、彼女の計画から距離を置いてはいなかったのでしょうか？ 私たちは皆、手を取り合うよりも一人ひとりでいた方がより本質的な活動ができると思っていなかったのでしょうか？ しかし彼女は人々の無関心をものともせず、粘り強く活動を続けて、オーストリアとハンガリーの平和協会を設立し¹²⁾、会議から会議へと駆けまわり、生半可な返事や曖昧な約束しか得られなくても、国家指導者や外交官を訪問し続けました。彼女は、大衆と諸国家の理解を得ようとしてしました。そして連帯を築けないと分かると、一人ひとりに目を向けました。彼女は、恐ろしい爆薬の発明家アルフレッド・ノーベルに会い、彼の良心を呼び覚ましました。その結果、彼は少なくとも一年に一回、人類に平和組織の存在を思い出させるあの賞を創設したのです¹³⁾。彼女は、昼夜分かたず数千の大砲と鉄砲が生産されるピッツバーグの紳士カーネギーに会い、自分の思想の味方にしました。彼女は、人間と人間を鎖のように結びつけました。小さな規模ではありましたが、最善の人々を結びつける、国家と国家の間に渡された鎖です。それは今日の三千万の兵士による激突の中にあつてすら、完全に引きちぎられてはいません。こうして、この人類の英雄的扇動者は、歴史に残る模範を示してくれました。女性は、たとえ選挙権を奪われて政治への公的な影響力を行使する権利がないにせよ、無為と無力を強いられたままではないのです。女性には、責任ある人々の良心を目覚めさせることによって、人間性を通じて人間へ、つまり心

から心へと働きかける道が常に開かれているのです。そして、彼女はどれほど人類の良心を揺り動かしたことでしょうか。彼女は何と注意深く『平和の守り』¹⁴⁾についていたことでしょうか。毎月、毎月、彼女はこの雑誌に諸々の出来事に関する批評を寄せました。それはほとんど読まれることも、論評されることもありませんでした——悲しむべきことに、すでに信念を持った千人の人々に読まれるだけで、信念を持たねばならなかった数十万の人々には読まれなかったのです！「武器を捨てよ！」という根本的な解決策を示したのは、彼女一人だけでした。その一方で、他の人々は外交的な塗り薬や政治的な飲み薬を使って、見せかけだけの一時的な健康を手に入れていたのです。バルタ・フォン・ズットナーは二十年前からこの世界戦争のことを分かっていました。その間、私たちの誰もが彼女のすぐ近くにいながら、何も感じぬまま自分の人生を生きていたのです。

しかし——私は皆さんに、そして自分自身に問います——私たちは何も予感していなかった、この世界戦争について知る由もなかった、と私が言うとき、私は本当に真実を口にしていくのでしょうか。然りと答えても、否と答えても、どちらも誇張があるように思います。なぜなら人間にはだれしも、一種独特な性質の知識があるからです。それは生への意志の本源的な機能と結びついた、特殊で危険な性質の知識であり、同時に無知なままでいたいという欲求です。私たちには、気づいていながら、それに気づいているのを意識していないことが多くあります。なぜなら私たちは、それに気づきたくないがゆえに、それを無理やり抑圧して潜在意識に、つまり心の薄明りの中に突き戻しているからです。私たちは誰でも、自分の中に死というものが巣食い、成長していることを知っています。しかし、より明るく生きるために、それを知ろうとはしません。そして、自分自身のために、あたかも永遠に生き続けられるかのごとく振舞っているのです。列車に乗って春の風景の中を走り抜け、車窓を流れる景色を楽しんでいるとき、前方では煤にまみれた半裸の男性がボイラーの炎の熱気に包まれて働いていることを、私たちは知っています。しかし、そんなことを考えていては心から楽しめないことは分かっているので、私たちはその考えを力づくで抑圧するのです。同じようにして、平和な暮らしを煩わされたくなかった私たちは、無頓着、無思慮、心の中にある自己保存の本能から、戦争が来ることを信じませんでした。しかし彼女、バルタ・フォン・ズットナーは、たった一人で悲劇的な使命を引き受けました。それは、トロイアのカッサンドラやエルサレムのエレミヤ¹⁵⁾のごとく、同時代からは煙たがられる、絶えず人を騒がせる役どころでした。彼女は怠惰な心に生きるよりも、むしろ人々から笑い者にされて生きるという英雄的な決断をしたのです。

しかし、嘲笑を浴びても決して行動を止めなかったというこのことが、今後も忘れてはならない彼女の偉大さであり、今この時のために彼女が示した模範なのです。ドストエフスキーは

かつてこう言いました。人間の最大の欠点、私たちの力を阻む最大の危険は、笑い者にされることへの不安である、と。彼女は尻込みせず達成不可能と思えることを要求しました。自分が唱えていた思想の深い悲劇性、平和主義のほとんど致命的な悲劇性について、彼女自身が他の誰よりもよく知っていました。平和主義は、決して時代に相応しいと思われないことです。平和にあっては余計、戦争にあっては愚か、平和にあっては無力で、戦時にあっては為すすべがありません。それでも彼女は、あの風車と戦った愚か者ドン・キホーテの役回りを、生涯、己が身に引き受けました。しかし、彼女が前々から知っていたこと、すなわちこの風車が挽きつづすのは風ではなくヨーロッパの青年たちの骨であることを、今日、私たちは戦慄とともに知ったのです。数百万の人々が戦場に立っているとき、達成不可能に思えることを求め、国家間の友愛と宥和の話をすれば、私たちがまた賢い人々や冷静な人々の前で、笑い者や愚か者の疑いをかけられるかもしれません。しかし、まさにこの気高い女性の例は、成功に影響と取り違えてはならないこと、一時のあいだ影響のないものが、将来は必ずしも実を結ばないわけではないことを示しています。私たちがこの女性に犯した罪と同じ罪を、今度は他の人々が私たちに対して犯すかもしれません。私たちは、彼女のすぐ近くに生きていながらおごりな友情しか持ち合わせず、責められても仕方のない消極的な態度で彼女の思想の実現を妨げたのです。彼女の例が驚くほど生き生きと示しているのは、ひたすら自分の思想に目を向け、自分の時代の中でその思想が持つ見かけの可能性にとらわれないとき、また人生の中から信念を作り上げ、そして信念の中から人生を作り上げていくとき、そのときにのみ、人の影響は命あるものになるということです。

使用テキスト

Stefan Zweig: Berta von Suttner. In: *Begegnungen mit Menschen, Büchern, Städten*. Wien-Leipzig-Zürich 1937, S.195–203. このスピーチの原稿は、第一次世界大戦末期、ズットナーの四周忌にあたる一九一八年六月二日にウィーンの新聞『ノイエ・フライエ・プレッセ』にも掲載された。これらのテキストでは、Bertha の名前が Berta と綴られている。

注

- 1) シュテファン・ツヴァイク（一八八一～一九四二）は、自伝的作品『昨日の世界』の中で、ズットナーとある出会いについて触れている。そのとき彼女は、「なぜあなたがた若い人たちは、何もなさらないのです？ 何よりもあなたがたにかかわりのあることなのですよ。どうかあなたがたの身をお守りなさい、力を併せてください！ 誰も耳を傾けてはくれない私たち二、三人の年寄った女たちに、いつもまかせ放しにしておかないでください」と、彼に語ったという。シュテファン・ツヴァイク『昨日の世界』(I) 原田義人訳、みすず書房、一九七三年、三一〇～三一頁。

- 2) ベルタ・フォン・ズットナーが没したのは一九一四年六月二日、サラエヴォにおけるオーストリア皇位継承者フランツ・フェルディナント夫妻暗殺事件は一九一四年六月二八日である。この暗殺事件から一ヶ月後の七月二日、オーストリアはセルビアに対して宣戦布告を発し、第一次世界大戦が勃発した。
- 3) ベルタはプラハのキンスキー宮殿で一八四三年六月九日に生まれた。父親のフランツ・ヨーゼフ・キンスキーはベルタが生まれる直前に七五歳で死去。キンスキー家は名門の貴族であったが、母親ゾフィー（旧姓：フォン・ケルナー）が伝統的な高位貴族の家系でなかったため、ベルタは実際には一族の一員として受け入れられなかった。
- 4) ドイツの統一をめぐるオーストリアとプロイセンが戦った普墺戦争のこと。七週間戦争とも呼ばれるように、オーストリアはプロイセンの近代的軍備の前に大敗した。
- 5) 『武器を捨てよ!』は一八八九年、彼女が四六歳のときにドイツのピアソン出版社から千部出版された。その後、大きな反響を呼び、ズットナーがノーベル平和賞を受賞した一九〇五年には三七版を数え、十六の言語に翻訳されている。この本の成功により、彼女は自ら平和運動の最前線で活動するようになった。邦訳には、『武器を捨てよ!』(上・下)、ズットナー研究会訳、新日本出版社、二〇一一年、がある。なお、彼女はこの作品以前にも幾つかの小説を発表している。ツヴァイクがここで彼女の「最初の本」と言ったのは、この本は彼女が反戦と平和を主題に掲げた最初の本であったこと、そしてこの本によって初めて彼女の名前が世界的に有名になったことを踏まえていると思われる。
- 6) ストー夫人（一八一〇～一八九六）の『アンクル・トム的小屋』が単行本として出版されたのは、一八五二年。『武器を捨てよ!』を読んで感銘を受けたトルストイ（一八二八～一九一〇）も、この二作品を比較して「奴隷制廃止の実現には、ピーチャー・ストー夫人という一人の婦人の、あの有名な作品が運動の先駆けとなりました。あなたの著作によって、戦争の廃止が実現されることを願います」と認めた手紙をズットナーに送っている。
- 7) ヴォラピェーク語 (Volapük) は、一八七九年にドイツの司祭 J. M. シュライヤーが提唱した人工国際語。一時は支持を集めたが、エスペラント語等の登場によって衰退した。
- 8) ズットナーは今日オーストリアで「平和のベルタ」という呼び名で親しまれているが、ここに書かれているように、それはもともとズットナーを風刺した言葉であった。それが世界大戦を経て彼女を称賛する言葉に変わったのである。
- 9) カッサンドラは、ギリシャ神話に登場するトロイアの王女。アポロンに愛されて予言能力を授けられるが、後にその求愛を拒み、彼女の予言を人々が信じないように定められた。彼女はトロイアの破滅を予知し、それを防ごうと努力したが、聞き入れられなかった
- 10) リュンケウスは、ギリシャ神話中の人物で、鋭い視力を持つことで有名。ゲーテの著作『ファウスト』の中にも望楼守として登場する。
- 11) 第一次大戦勃発後、ツヴァイクはフランスの作家ロマン・ロラン（一八六六～一九四四）と交友を深め、ヒューマニストとして共に平和主義を支持し、ヨーロッパの統合という理想に向かって行動した。
- 12) 「オーストリアの平和の友の会」と称するオーストリア平和協会は、ズットナーが自ら会長に就任して一八九一年に設立された。ハンガリー平和協会の設立は一八九五年、また一八九二年にはフリート (A. H. Fried 一八六四～一九二一) を支え、ドイツ平和協会の設立にも貢献した。
- 13) ズットナーはノーベル平和賞を受賞した最初の女性である。一九〇五年一月に授与が認定され、翌年四月一日、彼女はクリスチャニア(オスロの旧名)で『平和運動の発展』*Die Entwicklung der Friedensbewegung* と題する受賞講演を行った。なお、ズットナーとノーベルの最初の出会いは、一八七五年、彼女が彼の秘書

を勤めるためにパリへ赴いた時のことである。二人の親交はノーベルが没する一八九六年まで続き、この間、彼はズットナーの平和運動を経済的に支援した。ノーベルは平和賞の構想について、手紙で最初にズットナーに打ち明けている。

- 14) ズットナーは一八九二年から月刊誌『武器を捨てよ!』を編集・発行したが、一九〇〇年以降は『平和の守り』*Die Friedens-Warte*と改名して、フリートがこれを継承した。これらの雑誌に掲載された彼女の貴重な批評は、フリートの編集により二巻本の『世界戦争を避けるための戦い』*Der Kampf um die Vermeidung des Weltkrieges* (チューリヒ、一九一七)として出版されている。
- 15) 旧約聖書の中の預言者の一人。ユダヤ王国の滅亡、神との新しい契約と救済を預言し、人々に悔い改めを説いたが、反感を買って迫害を受けた。ツヴァイクはこの聖書の物語を題材に反戦的内容の戯曲『エレミヤ』(一九一七)を執筆。その初演のためスイスに移り、ロランらと共に反戦活動を行った。